

令和6年度第1回八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館運営協議会

日 時 令和6年8月26日(月)午後1時30分～3時

場 所 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 研修室

出席委員 山下治子会長 北野博司副会長 木村和彦委員 清水輝大委員
菅原弘樹委員 新山聡委員

事務局 八木田部長 中村館長 間副館長 小久保副参事 杉山副参事 船場主幹

次第

1. 開会
2. 委嘱状交付(正副会長選出)
3. 教育長挨拶
4. 会議

(1)是川縄文館の概要について

事務局：	概要説明
木村委員：	今回資料としていただいた要覧があるんですが、パッと見ると最初の表紙に開館当初の市長の写真が載っているのですが、これはどういうところに配布しているのかというのを確認したいのと、市長が変わったならば要覧もどうなのかなと感じたので、そこを確認したいと思って質問しました。
事務局：	要覧は、通常配布を行っているものではなくて、この館の調査や施設視察のときにお配りしている資料ですので、館に展示や構造的に大きな変化がない現状でございますので、現在でもこれを活用しております、今後展示替えやリニューアルの際には改訂をしたいと考えております。
木村委員：	要はまだ在庫があるという状況なんですね。
事務局：	おっしゃる通りです。
木村委員：	わかりました。でもちょっと抵抗があるなというのがあるのですが。
山下会長：	確かにそういうことはありますね。よく何年度版と書いてあったりするんですけど、これは平成23年度の発行なのでずいぶん経っているので。先程の資料で、是川縄文館の事業内容について、令和5年度に改訂しているところがあるので、私も先程申し上げたのですが、改訂しているのであれば改訂したほうがお渡しするのによろしいのではないかと。ただ予算上の問題もありますが。市長さんがお代わりになったのであれば、註記するという手もあると思うんですけど。ご検討のほどよろしく願いいたします。

	他はいかがですか。
清水委員：	今お話を頂いた中で教育普及などいろいろな事業についてお話いただいたと思うんですが、実際に現場で運営されているスタッフの方の組織体制というのは、教育普及に向けてエドューケーターがありますよとか、そういうのはどうなっているのでしょうか。
事務局：	年報の 54 ページをお開き願います。組織と職員構成をこちらに示しているのですが、教育普及担当のエドューケーターという分担はしていないのですが、ボランティアを含めた体験学習の担当の学芸員は 2 名おいている状況でございます。
清水委員：	ありがとうございます。承知いたしました。 あと、こちらにご来館になるお客様はどの辺からいらっしゃるお客様が多いんですか。
事務局：	年報の 55 ページにあるのが、ボランティアガイドをしたガイドの聞き取りによる利用状況です。アンケートの集計結果とは異なるものですが、3 分の 1 が市内、3 分の 2 は県外の方で、東北が 3 分の 1 くらいを占めていて、あとはその他関東圏が多いという状況です。
山下会長：	ボランティアさんがこれをお聞きして、なんとなくこれは市内の方だと。ガイドと東北、市内と市外は青森県内でも青森市なのか弘前市なのか、それも東北に入るんでしょうか。
事務局：	今の聞き取り調査ですと市外はすべて東北に入ります。実際はもっとしっかりした内訳があるんですが、資料上、東北という形でまとめています。
山下会長：	別に分析した資料があるということですね。
事務局：	はい、あります。聞き取りした一覧表がありまして、まとめた形がこれになります。
山下会長：	もっと分析したい場合は事務局にお聞きになればわかるということですね。でもどこからお見えになっているのかというのは把握するとき大事ですよ。今後見せて頂ける状況にあればよろしくお願ひしたいと思います。その他いかがですか。
菅原委員：	調査、研究の部分なんですが、今回の展示も非常にすばらしい展示で見させて頂いたのですが、この展示というのは大学との研究機関との連携事業ですか。その成果を展示にフィードバックするという形が非常にうまくいって素晴らしいと思っているのですが、これだけの事業を色々な業務をやりながら進めていくというのは非常に大変なんだと思います。組織を見ると、体

	制もきちんと整っているように見えるのですが、業務量を考えたら大変なのかなと思うのですが、これはだいたいどのくらいから準備したり、担当の方はどういう体制でやられているのか、外から見ると興味深いところがありました。ぜひちょっと教えて頂ければと思います
事務局：	共同研究につきましては、一期をだいたい三年としてやっております、職員は正、副の担当2名でやっております。三年目に研究成果を紹介する展示を行う事業計画を立てていまして、一年目二年目で研究をして、その成果を三年目に紹介して、毎年それぞれ研究成果を研究紀要でまとめながら進めていくという形です。いきなり三年目に公開ではなくて、ある程度まとまった形で研究紀要にあげて、整理しながら三年目をむかえて、三年目最後にまた研究紀要で総括して頂くという流れで事業計画を組み立ててやっておりますが、先生方も本務がある中で共同研究に時間を割いていただいておりますので、先生のスケジュールと我々の仕事をすり合わせていくのは大変な部分も確かにあったりします。
菅原委員：	ですから、展示の図録なんかも素晴らしいものが出来てくるんですね。きちんと積み上げたものを成果としてあげていくというところが。私の館は非常に小さく一人でやっているような館なんですけど、さっきもお話しましたけど、箱ものができてしまうとそれがゴールになってしまうケースが多くて。整備もそうだとおもうのですが、そのあとの活用をどうはかっていくかというのが非常に重要な部分だと思うんですけども、そういう意味ではこちらの館は非常にうまくいっている、動いている博物館というのを非常に感じる博物館だと感じています。お話を聞いてよかったです。ありがとうございます。

(2)令和5年度事業報告について

事務局：	概要説明
山下会長：	ただいまの説明に対してご質問があればいただけますでしょうか。
北野委員：	展示、特別展、企画展、共同研究、非常に密接に共同研究の成果を展示に結び付けているという話で、先程菅原さんからもありまして、極めて専門的で質の高い、世界にも誇れるような展示を今回見せて頂いて感動していたんですが、こういう展示とか共同研究の企画を学芸員の方がやっていると思うんですが、たとえば共同研究は今年度でいったん終わりますよね、来年度以降はもうすでにパートナーが決まっているんだろうと思うんですが、特別展、企画展はどれくらい先まで計画してやっているのか。

	<p>例えば、予算委員会的时候には決まっていると思うのですが、もう一年先くらいまで素案を作っておいて、こういう場所とか専門的な先生方の集まる場所でアドバイスをもらおうと、質がもっと高まったり、教育普及に活用するためにはどのような展示の工夫をしたらいいのか、専門の方もたくさんいらっしゃるのでは、そんなこともできるような気がします。現状はいかがですか。</p>
事務局：	<p>企画展示の展示計画は五年先まで決まっております、計画につきましては、次回第2回の会議のほうで令和7年度の事業計画説明の際にお示ししてご意見賜りたいと思っています。</p>
北野委員：	<p>共同研究はいかがですか。</p>
事務局：	<p>共同研究は今内部で意見調整を行っているところでして、素案は作っているところですが、ゴールとなる研究成果の展示の部分で可能だろうかというところで、結論がないような研究成果ですと展示が難しくなりますので、その辺見据えてどこまでいけるのかというところを学芸員の中で意見を出し合っているところでございます。</p>
北野委員：	<p>関連してもう一点いいですか。 今どこでも外国語対応とか、もちろんここは地域に開かれた博物館でいいんですけども、今回の展示の質を見ていると外国の方も喜ぶんじゃないかと思うくらいのものでしたのですが、そのあたりは館としてサインをどういうふうに外国語対応していこうとか、そういう方針はあるんでしょうか。</p>
事務局：	<p>正直なところ常設展で手一杯というのが現状です。ただ海外の方の見学もあって、そこはボランティアガイドの英語が出来る方に頼り切っているような状況でございます。ただ、アジア圏の方もヨーロッパの方もスマホでかざして翻訳を見て自己完結している方もお見かけして、スマホがあればいけるような感じも眺めていると感じている昨今でございます。</p>
北野委員：	<p>わかりました。ありがとうございました。</p>
山下会長：	<p>スマホの翻訳機能というのは、結構専門的な用語がありますけれども、あれも大丈夫なんでしょうか。日本人でもわかりにくい言葉があると思うんですが、スマホではどういうふうに表示されるんですかね。</p>
事務局：	<p>おっしゃるとおり、考古学や自然科学の専門用語は正しく翻訳されない場合が多いようです。そこはまだこれからというところですよ。</p>
山下会長：	<p>他ございますか。</p>
木村委員：	<p>資料に令和4年5年の入館者数の数字が書いてますけれども、令和5年度は開館した年に次ぐくらいの入館者があったということですね。この年は5月に</p>

	<p>コロナが2類から5類になって、ようやくコロナから解放されたということで5年度というのは増えたと思うのですが、前年度比でだいたい3,000人くらいのアップということで。ここの入館者はどの程度だと人が入ったなあという感じなのかはわからないのですが、もうちょっと増えてもいいのかなと感じます。そうした視点でお伺いしたいのは、やはり冬期間、是川縄文館だけに限らず種差なんかにしても、八戸のそういったところというのは冬期間どうしても訪れる人数が減ってしまうという。ただ、先程菅原委員、北野委員もおっしゃったように非常に質の高い展示ということで、それだけ専門家の方から評価されているものを行っているのであれば、やはりもっとPRの仕方を考えてもいいのかなと思います。</p> <p>お伺いしたいのは、冬期間の入館者アップに向けた取り組み。もう一点は、人々を呼び込むためのPRって、もちろんお金をかければすべていいというわけではないのですが、餅は餅屋で、PR専門の外部の方に委託して何年か取り組んでみてPRの仕方で来館者の推移がどうなるのか。もうちょっとPRの仕方を考えてもいいのかなと、私去年から委員をやっているのですが、そういうのは感じています。冬期間の対策と、PRの外部委託、是川縄文館だけではなく他の市の施設なんかも巻き込んだそういった取り組みも考えられないのかなあと。その二点についてお伺いします。</p>
事務局：	<p>おっしゃるとおりで、冬期がかなり、(不利な)アクセスに合わせて足元も悪くなるということで、非常に厳しい条件となり、何か新しいことを考えなければいけないと感じています。</p> <p>前年度から、首都圏向けに世界遺産あるいは是川縄文館にぜひいらしてくださいということで東京駅、上野駅、新幹線の乗換口にデジタルサイネージで是川縄文館のPR広告を出す取り組みを始めました。さらにトランヴェールという新幹線車内誌に秋に広告を打ちまして、一か月間、是川縄文館のPRをして新幹線ご利用の際はさらに八戸に降りて頂きたいということでPRをはじめておりまして、今年度はJR北海道の車内誌に広告を出した他、これから秋冬にかけて名古屋駅、新大阪駅、実は縄文遺跡群のイベントが名古屋で秋に開催がありますので、そういった期間に合わせて関西の方にも是川縄文館の広告を出す計画を持っていますので、そういった機会をとらえながら広くPRして足を運んでいただく取り組みを続けていきたいと思っています。その広告が、年報の38ページにございます。</p>
山下会長：	<p>実際はこういうのをご覧になって、少し増えているなという感触はあるんでしょうか。</p>

事務局：	この広告から追跡ができない形態でございまして、まだ実感は持っていないのですが、お客様の中でランヴェールの広告を見たという方はアンケートでありました。
木村委員：	SNS で PR をしているというものはあるんですか。是川縄文館独自に。
事務局：	今年の 3 月から SNS を本格的に始動しまして「いのるん」というマスコットキャラクターが紹介する形で、フォロワーは 1200 人くらいなんです、館内のことや遺跡の発掘のことを日々つぶやいております。
木村委員：	以前、三社大祭も相当東京駅とかで PR していたときもあったのですが、それもなかなか直接その時期に来てくれるのかということ、知名度も、あれは継続しないとだめなんだと思うのですが、今はその頃と違うのは SNS というものもありますので、そういったものを駆使して、何がバズるか分からないとか、ここで撮った一枚の写真ががーっとということもありますので、ぜひ積極的に活用して PR していただきたいと思います。
菅原委員：	その SNS を発信しているのは学芸員の方ですか。
事務局：	学芸員がやっています。
菅原委員：	うちも SNS を使っているんですが、極力私はタッチしないようにしています。というのは、私がやると売り込んじゃうんですね。やっぱり一般目線、うちは解説員にやらせるようにしているんですが、そうすると扱う写真の撮り方も違いますし、そういう反応がむしろいいなあと、自分でやるよりいいなあとと思っています。いろんなお知らせも作ったりするんですが、市報にも 1 ページいただいて毎月発信しているんですが、それも私は書かない。解説員に書かせてそれをチェックするくらいにしておく、デザインとかそういうもの、60 過ぎたおじさんが考えるよりは、若い感覚でやったほうがいいなと感じています。
清水委員：	うちの板橋区にタニタという会社があるんですが、あそこの SNS がかなり有名でして、SNS がバズると SNS のキャラクター自体が自立するんですね。公共施設と企業はまた違うと思うんですが、タニタさんの SNS のキャラクターが、毒づいたり、独自のキャラクターを持っていて、かなりバズっていて。実は我々の科学館の SNS 担当もタニタさんに何回も通って勉強させてもらったり、毒づいているキャラクターと我々がコラボレーションしたり、なかなか面白い展開になっています。
山下会長：	是川小学校との連携という話がありましたが、校長先生のほうからいかがですか。
新山委員：	縄文関係の資料が欲しいと思った場合、子どもたちが当たるのは YouTube

	<p>なんですね。その際なかなかヒットするチャンネルがそうないので逆にチャンスだと思っていて、特にペンダントづくりだとか合掌土偶作り、うちの場合だったら竪穴住居を作るところとかそういうのをのせてもらったり、掘っているところの解説とかをやっていただければ、今のところ小学校は縄文時代を詳しく調べるというカリキュラムはないのですが、調べたい小学校はたくさんあると思いますので、作っていただければ。先程からバズると何度も出ていますが、ある一定のニーズはあるんじゃないかと思っていました。</p>
山下会長：	<p>小学校3年生から6年生までありますよね。</p>
新山委員：	<p>1年生からいろいろペンダント作りとかってことをやっているんですが、ただのイベント作りで終わっていたものを、今はそうでなくて問題解決できる学習を落とし込んで、3年生は食についてやっていこうということでトチの実を調理したり、5年生だと竪穴住居を、体験的に穴を掘ってお店で買ってきた柱を立てて竪穴住居っぽいものを作ったり色々チャレンジしています。その際にこちらの小久保さんに相談しながら、こちらにあるカリキュラムを利用していただいたり解説をしていただいたりして進めていました。こちらのほうも、うちらでもうちょっと YouTube 作ったりしないといけないですよ。一応それをアップしていいかどうかは教育委員会の方と相談して。</p>
事務局：	<p>補足ですが、事業は年報の16ページの下の方に是川小学校さんとの連携ということでご紹介させていただいています。</p>
新山委員：	<p>これ（年報の写真）は、からむしを取っているところです。4年生が衣食住の「衣」で布を作るというのをテーマにやっているんですが、こちらの方の、遺跡の中の植栽からからむしを一緒にとって、何株か分けて頂いて学校でも育てようとしているんですがなかなか大きく育たなくて。何年かすれば、ここに負けないわけではないんですが、少しずつ育てていければと。これだけでは足りないのでも麻でも使ってやってみようかと。学問的には違うと思うんですが、小学生は体験しながら学んでいくというのが重要なので、学校は学校で協力しながらやらせていただいています。</p>
山下会長：	<p>学校の授業だけではなく外に出るというのも子どもたちにとっても。</p>
新山委員：	<p>6年生はそれこそ今掘っている松ヶ崎遺跡を見学してから、発信の準備をしています。修学旅行は北海道の世界遺産を2カ所回って、できれば洞爺のほうにも行きたかったんですが予算的に難しかったので。それもこれも、縄文館のもとがあるので、私たちはそれを活用させていただいているという形です。明日もお邪魔します。一日かけて先生たちがこちらでいろいろ教えてもらって、それを子どもたちにフィードバックしながらカ</p>

	<p>リキュラムを充実させていこうとしています。</p> <p>先程も申し上げたんですが、調べようにもなかなかネット上で詳しいところというのがないので、そういうチャンネルができればいいんじゃないのかな、と。</p>
菅原委員：	<p>素晴らしいですね。なかなか学校との連携は重要だといわれるんですけど、学校の先生方も忙しくてですね、昔は総合的学習の時間が始まった平成14年くらいの時期は、先生方も何やったらいいのかわからなくて、みんな博物館に子どもを連れてきたりするんですが、だんだんそれでは成果が出ないとわかりはじめたのか、授業に英語が入ったりとか、なかなか来れなくなってきているんですね。先生たちもそういう校外学習のひとつのプログラムとして来る程度で、今お話聞いていると先生方が集まって研修に来たりとか、その連携というのは他にはないんじゃないかと。一番史跡をやっている、そうできたらいいなあと思ましく思っているところなんですけど、非常にうらやましく思います。</p>
新山委員：	<p>館長さんたちも快く受け入れてくださっているからだと思います。</p>
山下会長：	<p>小さなうちから八戸の、自分は是川人だと思ってもらえるのはある意味でアイデンティティになってくると思うのでよろしく願いいたします。</p>
北野委員：	<p>たくさん事業をやっておられるのはわかるのですが、業務を増やすというのは現実的に難しいので、ある事業とある事業をつないでいくということで価値が高まっていくというのがひとつ鍵だと思うんです。それは、先程の共同研究と展示をつないでいくということもあったし、小学校との連携でいうと、私がかかわっていることでうまくやっていると思うのでは、史跡整備、是川もこれから実施設計をやって来年度から実際にかかわるんですかね。そうすると、整備を行政がやって作り上げてしまうんじゃなくて、色々な方と共同で一緒に作るんですね。</p> <p>山梨県の南アルプス市はこういう分野ですごく頑張っていて私も一緒にやっているんですが、小学生が、あそこは石積堤防の国の史跡（御勅使川旧堤防）なんですけど一緒に石を積む。我々も積むし文化庁の調査官も行って一緒に積むんですが、石工さんがいて、我々がやって心もとないところは専門の方が直してくれたり、植栽の縁石を子どもたちと我々が一緒に積んでいく。それは、事業が終わってからも続いていくんですよ。ずっと整備が成長していくようなやり方に取り組んでいる。記念式典の時も、小学生がその遺跡の紹介を寸劇にしていろいろなクイズも出しながら我々の前で手を上げさせてやってくれて、感動のセレモニーだったんですが、そんなふうに学校教</p>

	<p>育は教育として今やっておられることもいいんだけど、整備と組み合わせるとか。そんな工夫をされていくと、まだまだ可能性はあると思いました。その自治体の面白いところは、ヤギの除草ですよ。こちらのほうも、37ページでやっていますが、先駆的に史跡の管理にヤギを使った自治体だと思うんですが。</p> <p>やっていくとだんだん問題点とか、このエリアだったら何頭あればいいのかとか、子どもと触れ合わせると子どもはまた来てくれるので、どうやって触れ合わせるとか。かなりいろいろなノウハウを持っているので、こちらもこういう紹介だけだと、課題とか今後の展開は我々には情報がないのですが、もっともっと学校との連携、学校だけではなくて子どもたちが何度も来てもらえるようにヤギをうまく活用するとか、そんな話もあるので、私が言いたかったのはいろいろなものをつなぎ合わせてやっていくと作業もそんなに増えないし効率的に且つ新しいやり方が回ってくるのかなと思っていました。そんな意見です。</p>
<p>清水委員：</p>	<p>それに関連して。</p> <p>私が八戸、はっちにいるときに、お芝居の盛んな地域だと思うんですが、その皆さんから学んだことがあって、お芝居をやると出演者の方が身近な人をひたすら連れてくるんです。そこが、かなり私としてはショッキングな出来事だったんです。結局イベントをやって、身の回りの人で賑わいを作ってそれに連れて来られる。八戸で学んだことで、今板橋でやっていることがひとつあって、子どもたちが職業体験とかいろんなイベントで学校から来るんですが、彼らに学校通信や学年通信をジャックしてもらおうというのをやってまして。学校で出される学校通信ってあるんですかね。そのひとつ区画を子どもたちが手書きで書いた記事をそのまま、学校から配ってもらうものに記事として書いてもらってということをして最近はじめたら、八戸で学んだことどおりみたいな感じでうまい具合に、子どもたちの親や祖父母まで子どもに連れられて科学館に遊びに来て、そこで僕が教育普及側の人間として学んだのは、広報活動を子どもたちにやってもらうことによって子どもたちの学習活動という意味でも、大変主体的な活動になって、しかも記者の視点で、地元の記者の方にもどういうふうに記事を書けばいいのか教えて貰うのですが、そうすると、どういうところを見るとよりおもしろく伝えられるのか、視点を定めることができ、子どもたちも漠然となんとなく流して見るのではなくて、深くそれぞれを見るようになったという感覚があったんですね。なのでそのあたりを僕としては面白かったのでぜひお伝えしたいと思ったとこ</p>

	<p>ろと。</p> <p>もう一つご質問になってしまうのですが、入館者数の話も最初にあったと思うんですが、皆様方的にもっとこういう人に来て欲しいと思っていたり、今の入館者数で実は正直職員の人数もあって手一杯なんだよねとか、そのあたりの所感をお持ちだったりされるんでしょうか。</p>
事務局：	<p>縄文学習館という、ここが出来前の建物があった頃は年間1万人だったんです。是川縄文館が出来てから、約3万人前後。この施設ができたおかげで2万人増になった。今も継続できているというのは、人口減少にある東北の中では結構増えているのかと個人的には感じているところです。ただお客様からは、特に首都圏・関西の方からはもっとPRしないとだめだ、こんなによかったので他のひとにも知って欲しいけど、あることすらわからないとおっしゃる方もたくさんいるので、そういう方に訴求したい、もっと知って欲しいという気持ちはあります。</p>
清水委員：	<p>私自身は、ここの立地条件も踏まえて3万人という数はすごいと思っていて、ただこちらの館のポテンシャルみたいなことを肌で感じていた身としてはもっと増えてもいいなと、この二つの要素をどうつなげていくかというのが課題かと思っていて。</p> <p>私は上野駅を使っていて、まさに、さっきおっしゃっていた広告を上野駅で見っていたんですけど、あれを見ていきたいと思うひとはどういう人なんだろうと考えながら見ていたりとか。最近では原宿の竹下通りとかで遊んでいる女の子たちが、土偶が好きだという記事が若干あったりとか、そういう人たちをもってくるにはどういう活動をしたらいいのか。ある種、ターゲティングみたいなものを明確化してこの事業をこれからは拝見させていただければと思っておりました。またおいおい、こういう人連れて来たいんだよねとかあればお伺いしたいと思っておりました。</p>
山下会長：	<p>ありがとうございます。</p> <p>流れ的にはあと十五分くらいなのですが、その他のことで何かご意見ご質問など。</p>
北野委員：	<p>今回こうやって全部の事業を見せていただいたんですが、本当に皆さん埋蔵文化財センターと、博物館的な施設とか史跡整備もやって、簡単に言うとすごくたくさんの業務をやっているんですね。その中でいろいろな立場の人がここの良さを見出しているのですが、縄文館として、何かの事業でとんがってやろうというようなポリシーがあるのか。幅広く地域の博物館、縄文館としてやっていかないといけないというか、広く浅くというかそういう方針な</p>

	<p>のか。両方は両立すると思うのですが、そこのポリシーがあるのかどうかをひとつお聞きしたかった。もうひとつは、こういう会議でやりましたという事実報告だけではなくて、私はどちらかという失敗してうまくいかなかった、こんな本質的な問題があるということバンバン出していただく方が、これだけの方がいるのもっとアドバイスできるのではないかという思いがあります。その2点分かる範囲でお答えいただければ。</p>
事務局：	<p>是川縄文館は、埋蔵文化財調査と史跡教育普及という二つのグループでやっています。私は、発掘ではないチームの視点からいいますと、共同研究ですとか是川遺跡、風張遺跡を使った縄文のPRというのがこの館の大きな柱だと思っています。そういった意味で今回、非破壊で重要文化財の籃胎漆器を研究して成果を出せたというのは他の館にない、文化財活用の二巡目に突入している、他の館にはない特色だとよく話し合いをしていて、他の館でここまでできているところはあるんだろうかと話をしているところですので、研究ベースで展示や教育普及ですとかグッズですとか史跡整備に係る情報を作っていく、研究が中心・核にある館というのがこの館の資源、そういうふう考えております。</p>
北野委員：	<p>とても共感しますし、企画力とモノとモノ、コトとコトをつないでいくという皆さんの行動力だと思いますので共感します。もう一点。</p>
事務局：	<p>失敗、課題はたくさんあります。それぞれ学芸員の資質や能力いろいろありますが、成功経験に頼らない技術や知識の伝承というのは非常に大きな課題でして、私たち四十代後半の学芸員の能力がこのままずっと維持していけるのかという不安はありますし、また別の思いで新しいことをはじめてもらえればいいのですが、この状況が続けていけるのか、あるいは別の形に変わっていけばそれはいいと思うんですが、そうした課題は常日頃感じているところでもあります。</p>
北野委員：	<p>新しい方法とか改善をしていくためには、やはり自己点検して課題になったことをひとつひとつ、全部つぶすわけではないけれども、つぶせることはつぶしていくということも大事だと思うので、出せる範囲で出して頂ければと思います。以上です。</p>
山下会長：	<p>ありがとうございました。</p> <p>失敗のところは、何が失敗だったのか、言えないような失敗もありますよね。課題というのはわかるけれども、これを解決するためにはどうすればいいのか、ずっと続いてしまうことはよく私もありますが。そういうときにきっと何か別の視点から見るというのは、今北野委員がおっしゃったように、色々</p>

	と連携してみるというところも、ひとつの課題解決に繋がっていくのかなあと。
北野委員：	アイデアを持った皆さんがこれだけ集まっているので、力を利用したらいいなあと思いました。
山下会長：	<p>先程の南アルプス市ですけど、あそこの学芸員の方に話を聞いたときに、あそこもラヴィちゃんという土偶が出ていますが、すごいのが出ているのにみんな知らないと言っていたそうで、これはなんとかみんなに教えなくちゃと、最初の頃は文化財の話、南アルプス市には何もないよね、みたいな話だったようなのですが、とにかくすごいんだよということを、いろんな持ち出せる文化財は持って行って、居酒屋にまで行ってしゃべったりしたそうなんです。もちろん小学校、中学校も。何年かやっている小学生だった子が中学生になって、こここうだよと学芸員さんに喋ってくる、僕たちのところすごいんだよと教えてくれる。その蓄積が、先程の是川小学校の話ですけども、細かいことでもどンドンやっつと蓄積していくことが応援、支援をもらえる、そういうことに繋がるのかなあと思いました。</p> <p>他は何か、これは言いたいということがありましたら。</p>
菅原委員：	<p>南アルプス市の話ですが、子どもたちが遺跡の説明看板を作るんですよ。あれは素晴らしいなあと思っています。我々こういうことをやっている、成果がすぐに出ないと不安になるんですけど、我々のやっている仕事はそういう仕事ではないと思うんですね。地道にやるというのが私たちの仕事だと思うので、どこでそれがうまくいったのかというのがわからない部分はあるんですが、とにかく種をまいていくというのは必要なのかなあと思っています。</p> <p>事務局ももちろんご存じでしょうけど、北黄金貝塚で市民の方が樹を植えて整備をして、そのあと市民が少しずつやって行って、今素晴らしい森になりましたよね。ああいうのが、我々がやるべきことなのかな、と。史跡整備の中で、実施設計、業務計画を作ってこの辺りに植栽をして、それを作りますけど、そうじゃなくて、その先どうしていくのかというのが重要なのかなあという気がします。目の前のことというより、もう少し先を見据えて、じっくり腰を据えてやっていくという体制、組織作りというのが重要なかなと思います。</p>
山下会長：	ではこの委員会もそういう気持ちで、皆さんとご意見を出しながら作っていただければと思います。今日はありがとうございます。事務局のほうからいかがでしょうか。

<p>清水委員：</p>	<p>最後に少しよろしいですか。</p> <p>大変驚いているところがありまして、土偶マイムもそうなんです、私のはうちにいたときに YORIKO さんと一緒にコラボレーションされていた時空探検隊でしたか、そういった越境的な活動をされていて、私たち今科学館でも主たるターゲットは実は科学好きではないように設定して、新しい客層を作るためには、科学好きが来るところだけではなくて科学好きになりそうな人たちをどう呼ぶのかという話になってくると、科学のことだけを語ってもお客さんはこないということがわかっていて、そこからどう、斜め上のメッセージングをして何か変だということの特徴としてとらえてきてくれる人たちが、実はこちらの館では大変その重厚な研究成果に基づいた活動をされているという、そのフローが成り立っているような気がしています。</p> <p>単純にこういう類似施設で年間3万人というのはかなりすごいと思うのですが、ここからさらに増やしていくという事を考えると、おそらく前例のないことを皆様はチャレンジしていくような話になると思っていて、大変楽しみだと思っています。</p> <p>我々の館でも今課題になっているのですが、とんがった部分というのが、アウトリーチ、何か館のことを表現するタイミングになると、いきなり固くなってしまふということがあって、せっかく頑張っている特徴が公になるとそこがあまり見えないような状態になってしまうような気がして。たとえばこういう土偶マイムというのはワーディングだけでかなりなんだこれだと思いますし、それが例えば上野で土偶マイムって書いてあったらなんだこれ、となると思うと思うので、そういうようなアプローチも出来たらいいなと感じました。自分の中で感動して驚いたので、最後にお時間頂きました。</p>
<p>事務局：</p>	<p>補足となりますが、ターゲットというお話で、先般文化庁のオンライン研修の中でターゲットの話が出ていまして、そこで紹介されていたのがファンベースの考え方です。とにかくターゲットを広げても情報の海の中で消えていくだけなので、ファンを大事にすると周辺部が広がっていくということで、ファンベースというのがこの館には合っているんじゃないかと個人的には思っているところです。以上です。</p>